

● 皇祖皇宗に奉る郊祭

月日が流れて、ヒミコの墓（箸墓古墳）がバチ形を伸長した前方後円墳に様変わりすると、神武はそこに祭場を設けて、厳かな儀式に臨んだ。

まず、女王トヨの亡き骸をホケノ山古墳から掘り出してバチ形伸長部に再葬した後、二重口縁壺や花なども供えながら女王トヨの冥福を祈った。

三〇四年の春二月二十三日（桃の咲く頃）、上之宮南方の鳥見山中に皇祖天神（日神と高皇産靈）

の御陵が完成すると、神武はその円墳上に、靈時（天地五帝の神靈を祭る靈廟）を造営して、高皇産靈に代わって郊祭に臨んだ。すなわち、箸墓円墳に眠るヒミコの御靈を日神御魂に蘇らせた上で靈時に移し祭るとともに、纏向石塚古墳に眠る天照大神御靈を高皇産靈御魂として招来し、共に天（日天神）に配したのだ。

その間、猿女君らが神楽を舞う中で、天富が祝詞を長々と奏上していた。ついで、神武は神璽の鏡剣を捧げ持って皇祖天神の再来を願いつつ、お礼の言葉と決意のほどを申し述べた。

「我が皇祖の御魂は、日の光となって天より降り賜い、私の身を金色の光で照らして加護して下さった。今、数々の敵を平定して、天下も平穩に治まっております。そこで皇天二神を天に配してお郊祭りし、その教えるところに永久に従いたいと誓った次第です」

『古語拾遺』、「靈時を鳥見山の中に立つ。天富命、幣を陳ねて祝詞して皇天を禋祀り、群望を遍祓りて、・・・」、

「聖皇（天皇）の登極（天つ日継ぎしろしめ）して、終を父祖に受けたまい、上帝（五帝）

を類り、六宗を禋り、山河を望り、群神を偏りたまう。然れば、天照大神（日神と高皇産霊）

はこれ祖おやこれ宗かみ（皇祖皇宗）、尊きことならび無し」

つまり、神武は高皇産霊が封禪を成したとしても道理に適うと見て、彼に代わって柴を勢いよく燃やす中で封禪しながらに郊祭し、その高煙が天に通じたところでお礼の言葉を申し述べるとともに、皇祖天神を天に配して皇祖皇宗に奉ったのだ。

加えて、天照大御神御魂の伊勢大神（真経津の八咫鏡）、及び高皇産霊御魂の草薙剣を二神の天璽と定め直したことや、若かりし頃の豊受皇太神（御饌津神）を農耕神に列して、秋になると新穀を捧げることもお知らせした。

この儀式の抛りどころは五帝期の封禪や、成王を補佐した周公が后稷（周祖棄）を南郊に祀つて天（農耕の天神）に配し、秋に新穀を奉った周礼、また文王を明堂に祀つて皇祖に配した周礼、さらに光武帝が漢朝を再興した際の封禪や郊祭にあつたことは明白だ。

〔封禪と郊祭〕、五帝最初の黄帝が泰山の頂で円壇を築いて天を祀り（封祭）、ついで山麓の梁父山で地を方形に均して地の神を祀る儀式（禪祭）を言った。かくして、黄帝は天帝や仙人たちと親しく交わり、人でありながら不死身に成り得たという。即ち、現人神となつたのだ。

次に、堯から跡を託された舜が封禪を試みた。彼は天体の動きを見て天意に適うと知るや、上帝に対して類の祭を行い、六宗に禋りくせうの祭をし、山川に望ぼうの祭をして、群神もあまねく祀つた後に諸侯の玉器を収めて吉日を選び、並み居る臣下たちの前でこれを分け与えた。これが最初で最も盛大な封禪とされるが、その封の礼は明らかでない。こうして、仙人の仲間入りを果たした彼は、崑崙山に荘厳華麗な地上の帝都を設け、暇を見つけては天上から降ってきて浮世の仙人らと神仙

遊びにふけていたという。

〔周成王の郊祭〕、周公は幼い成王を助けて政に就くと、后稷を南郊に祀って天に配し、文王を明堂に祀って上帝に配した。

それ以前に、火徳をそなえた文王は赤い鳥が現れるという瑞祥によつて、封禪の天命を受けたが泰山での封祭を行わず、武王も殷を破つた二年後の天下が未だ安定しない時期に逝つてしまった。これからすると、続く成王が封禪を成したとしても、道理に適うとされた。そのこともあつてか、古来、周では冬至の日に南郊して天を祀るとともに、日が長くなることを祝つた。また夏至の日に北郊して地の神を祀つた。

〔後漢光武帝の封禪と郊祭〕、五十六年二月、光武帝は魯国から泰山に向けて巡幸した。遠くから泰山を望む地で柴を焚きながら望祭した後、泰山の頂と麓の梁父山で封禪を成し遂げた。

建武中元二（五十七）年春正月に初めて北郊を立て、后土（地の神）を祀つた。その直後、倭奴国王の遣いがはるばる海を渡つて朝貢してきた。

『後漢書』「光武帝紀」、「建武元年、二十五年）六月末、皇帝の位に即く。燔燎はかりようして天に告

げ（柴を焚いて祭り、高煙が天に通じたところで天に報告し）、六宗に禋えんし、群神ほうに望す。・

ここに於いて建元して建武と為し、天下に大赦し。・

『後漢書』「本紀」、「建武中元）二年（五十七年）春正月辛未、初めて北郊を立て、后土を祀る。東夷の倭奴国王、使を遣わして奉獻す」

この鳥見山から北へのびる尾根上には、四世紀初めに造られた日向型の柄鏡形前方後円墳が鎮座する。桜井茶臼山古墳と呼ばれるそれには、樹齡千年以上の巨木からなる木棺が安置されてい

て、その内外に二六面の三角縁神獸鏡をはじめ、内行花文鏡・方格規矩鏡・画文帶神獸鏡・獸帶鏡など八〇面以上の銅鏡、それに三種神器である曲玉・鉄劍、さらに王権を示す碧玉製の玉杖・玉葉が副えられていた。

その円墳上に土を盛った方形壇があつて、その周りを底のない祭祀用壺が取り巻く。この古墳は帝王級副葬品が豊富にあるにもかかわらず、被葬者の名も伝わらない。

その後の神武は、程なく崩御したのか、隠遁したのか、消息は不詳だ。

磐余地方にある巨大なメスリ山古墳（桜井市、四世紀の初め?）も、阿部丘陵上に造られた謎多き柄鏡形前方後円墳だ。

後円部にある長さ八¹/₂の主室は盗掘されていたが、それでも三角縁神獸鏡片・内行花文鏡片、各種石製品・玉類などが出た。盗掘を逃れた東の副室からは、儀礼用らしき鉄製の弓・矢五本、鉄鏃二一二、鉄製のヤリガンナ、斧、手鎌、ノミ、刀子、ノコギリ、銅鏃二二六が出土し、さらに玉杖四本分に相当する石製品など帝王級副葬品が多数見つかった。類似の玉杖は桜井茶臼山古墳からも出ている。

この円墳上にも方形壇があつて、最長二・四¹/₂もの円筒形埴輪が壇の周辺を二重に取り巻く。にもかかわらず、被葬者の名は伝わっていない。

『古事記』は、「（磐余彦天皇）御陵は、畝傍山の北、白檮の尾の上にある」と記しているが果たしてそうだろうか。

磐余地方の山の稜線に、四世紀初めに造られた日向式の柄鏡形前方後円墳が『日本書紀』の記述に沿った形態で二陵も築かれたことは、以下の遺勅や言葉と無関係ではあるまい。